

「主よ 私を救ってください」

(詩篇6・1〜10)

一、「ダビデ」の嘆き

(※ 作者をダビデとして読んだため、「ダビデ」と表記しました。)

1節を「ご覧ください。」主よ 御怒りで私を責めないでください。あなたの憤りで私を懲らしめないでください。とあります。ここに、「ダビデ」がヤハウェなる神の前に罪を犯したゆえに、悶え苦しんでいる姿が見えてまいりませぬ。「ダビデ」の言葉を聞き限り、「非は自分の側にあります。私に弁解の余地はありません」という思いが伝わってまいります。「ダビデ」は、自分が犯した罪のゆえに、あるいは自分が関係する罪のゆえに、神との正常な関係が遮断されてしまい、もがいています。同時に、「自分はここから逃げられない。否、逃げてはならない」と思っています。このような「ダビデ」の姿は、実は神から離れていない姿です。神の恵みに捉えられている姿です。こうして「ダビデ」がするの、主なる神のあわれみでした。2節、3節です。主よ 私をあわれんでください。私は衰えています。主よ 私を癒やしてください。私の骨は恐れおののいています。私のたましひは ひどく恐れおののいています。

主よ あなたはいつまで——と。祈りの言葉を見ますと、次第に思いが高まっていることが分かります。「私」から「私の骨」へ、さらには「私のたましひ」へと。極めつけは、3節後半の「主よ あなたはいつまで——」です。祈りの言葉が途中で止まっています。祈り求める言葉は、さらに激しくなっています。4節です。主よ 帰って来て 私のためしを助け出してください。私を救ってください。あなたの恵みのゆえに。と。「ダビデ」は必死に訴えます。5節です。死においては あなたを覚えることはありません。よみにおいては だれが あなたをほめたたえるでしょう。と。詩篇の背景にあったのは、人は死んだら終わりであるという、古代イスラエルの考え方でした。したがって、神の公正さも神の真実さも、人が生きている内に実現されなければなりません。なぜなら人が死んだらその時点で終わってしまうからです。

二、祈りが聞かれた

「ダビデ」の思いは、神の前にさらに高まってまいります。6節、7節です。私は嘆きで疲れ果て 夜ごとに 涙で寝床を漂わせ ふしどを大水で押し流します。私の目は苦悶で衰え 私のすべての敵のゆえに弱まりました。と。夜通し涙を流していたとは、詩的に誇張した表現のようにも見えますが、そ

れほど主の前に取り乱していたのでありましょう。ですが、神の時が訪れ、大きな変化が起こりました。自分か犯した過ちのゆえに、神と自分との間に断絶があるように思われていましたが——そんなことはないのですが——、神が介入し、それまで立ちこめていた暗雲がたちまちの内に消えました。それは、8節、9節を見ると分かります。不法を行う者たち みな私から離れて行け。主は私の泣く声を聞かれたから。主は私の切なる願いを聞き 主は私の祈りを受け入れられる。と。神が祈りを聞かれたと知ったのでした。こういう変化を、どう説明したら良いのでしょうか。なかなかむずかしいです。聖書が語る人格的な神を経験しなければ、単なる心の変化としか映らないことではありません。あるいは、双極性障害(躁鬱病)のように見えるかも知れませんが、聖書が指し示している神は人格的な神です。すなわち、私共人間と言葉を解して交わられる神です。「ダビデ」は信仰の危機にありました。が、神との関係が回復されたのです。「ダビデ」の努力によってではなく、神ご自身の介入によって。ゆえに、8節、9節こそは、この詩を、神をたたえる詩として皆の前に披露できるように考えた理由の言葉です。こういうことを考えてみたら良く分かります。この詩篇から8節後半と9節を取り除いて読ん

でみてください。こうなります。7節より8節前半、そして10節を読んでみます。私の目は苦悶で衰え 私のすべての敵のゆえに弱まりました。不法を行う者たち みな私から離れて行け。(略)私の敵が みな恥を見 ひどく恐れおののきますように。彼らが退き 恥を見ますように。詩篇の言葉としては、ふさわしくなくなってしまいます。

三、御思いと一つになって

最後に、8節前半と10節を、改めて見てまいります。不法を行う者たちみな私から離れて行け。(略)私の敵がみな恥を見 ひどく恐れおののきますように。彼らが退き 恥を見ますように。瞬く間に。とあります。この言葉だけを聞いたら、ひどい言葉に聞こえますが、「ダビデ」は主が私の泣く声を聞かれたからだ。主は私の切なる願いを聞き 主は私の祈りを受け入れられる。という文脈において語っています。すなわち、主なる神の御思いと一つになって、この言葉を語っていることが分かります。

神は不法を行う者たちを退けられませぬ。神は高ぶる者たちを退けられます。神は創造主を畏れない者たちを嫌われます。ならば、8節前半と10節の言葉は人が人を退けた言葉ではなく、神が神の敵を退けられた言葉です。